

## 43. 高齢者等の外出行動を支える公共施設における 休憩空間整備のあり方

- 絹川麻理 (兵庫県立福祉のまちづくり研究所)
- 北川博巳 (兵庫県立福祉のまちづくり研究所)
- 室崎千重 (兵庫県立福祉のまちづくり研究所)

### 【 目 的 】

高齢者等の外出行動を支えることは、自立した地域居住の継続を支援することにつながる。本研究に先駆けて、介護予防が必要な在宅の高齢者と認知症グループホーム(以下、GH)の職員(入居者の外出に関して)を対象にアンケート調査を実施し、両者の外出における休憩の実施状況を把握した。その結果、両者ともに、外出の頻度が高く、スーパーなど物品販売店への外出が多いものの、外出に不安感をいんでいること、両者に共通して、休憩空間の整備を重要視していることを把握した。介護予防が必要な在宅高齢者では日常生活の継続において、GH では生活リハビリやケアの実施において、外出を継続することは重要である。そのためには単に座れる場所を確保するばかりではなく、高齢者等の利用ニーズに合致した、歩行や外出を支える休憩空間を整備することが重要である。

そこで本研究では、①高齢者等の公共施設内の休憩空間の利用実態と利用ニーズを把握し、②環境改善の検証を行うことで休憩空間整備のあり方を検討することを目的とした。

### 【 方 法 】

目的①： A) 高齢化率が高い地区にある物品販売店(以下、I店)を対象とし、I店において最も利用客が多い食品売り場のある1階の休憩空間を対象に、非参与観察調査により休憩空間の利用実態(利用者属性・利用用途・時間)を把握した。

目的②： B) I店内の1階休憩空間にはレジ裏側の通路(動線)上・エスカレーター(垂直動線)横(図1上の1)に半固定ベンチ椅子(3名用木製ベンチ3脚、肘掛無し、1脚は背もたれなし)があるが、同階の別場所(図1上の2)(食品売り場から離れた出入口付近の催事コーナーの1部)に新たな個別可動椅子を設置した。先行のアンケート調査ならびにA)の結果をもとに、高齢者の利用ニーズに合うと思われた椅子を用いた環境的介入を行い、利用者アンケート調査による休憩空間の椅子と配置に関する環境評価を行ってもらった。

### 【 結 果 】

#### 1. 物品販売店における休憩空間の利用状況

I店は37%の高齢化率を示す地区にある。1階総売り場面積は1,262㎡であり、中規模のスーパーである。利用客の公共施設内の休憩空間の利用状況を把握するため、1階の既存休憩空間1(図1)を対象として、1日間、10:00~12:00と13:30~15:30のベンチの利用状況を観察した。利用者の年齢層(~10歳、10~30歳、30~60歳、高齢者)と歩行支持具

(杖やシルバーカー)の利用、ベンチで休憩した時間とその時の状況(休憩直後の行動や様子、個人/集団利用。5分毎に同項目について目視確認)を記録した。多様な世代に利用されていたが、高齢者で歩行支持具無し(38%/全利用者数 81名)と30~60歳で歩行支持具無し(31%)の客の利用が多かった。支持具を利用する高齢者を合わせると、高齢者の利用者は54%となる。個人の利用が多いが、高齢者では、複数人での利用が4組みられた。(図2)

利用時間は数秒から約50分にわたった。短時間の利用(5分未満:65%)が中心となっているが、長時間(30分以上:15%)利用している人もみられた。休憩直後と休憩中5分毎の状況を観察した。身体の動きを伴うものを行動、それ以外を状態として分析した結果、表1の分類となった。休憩直後には「荷物を整理する(17人)」「特定不可(身体の動きや状態が観察できず、体を休めているような状態:13人)」「話す(11人)」が多くみられた。休憩中では、「話す(45人)」「周りを見る(20人)」「首の動きはなく正面を見ている(16人)」が多かった。年齢グループ別に休憩直後の行動をみると、高齢者で支持具無しのグループでは、「話す」が多く確認された。

## 2. 個別可動椅子の設置による環境改善の検証

先行のアンケート調査では、立ち上がり支持・転倒防止のための肘掛・背もたれのついた椅子が必要であり、座面高の再検討が必要であること、また、利用人数をフレキシブルに調整できる、複数名でも1名でも利用しやすい休憩空間が求められていることを把握した。そこで、福祉施設で用いられる木製スタッキ

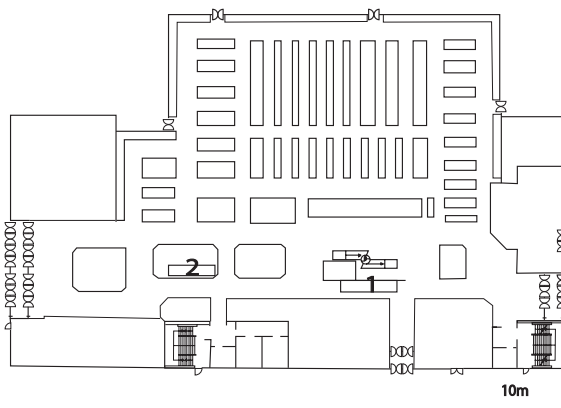


図1 1店1階平面図(1:既存休憩空間、2:調査で設置した休憩空間)

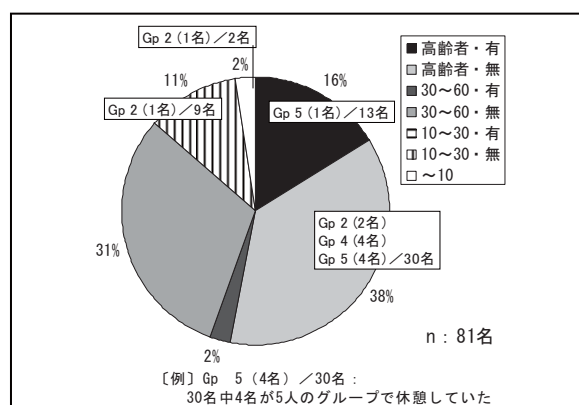


図2 既存休憩空間の利用者属性

表1 休憩空間の利用にみられた行動・状態

行動・状態	休憩直後の行動 (ノ81人)	休憩中5分毎の行動・状態 (ノ48カウント)
見る:		
見る:	首の動きがあり周りを見ている	8 / 20
食べる:		4 / 1
飲む:		2 / 2
話す:		11 / 45
読む:	雑誌などを読む	5 / 11
書く:	メモを書く・書類に記入する	1 / 3
確認する:	予定表・紙切れのメモなどを見る	1 / 0
整理する:	荷物を整理/確認する・かばんの中の整理	17 / 3
整容する:	髪の手・服を整える	2 / 2
お金を管理する:	財布を見る・お金を数える	7 / 2
電話する・メールする:		7 / 5
支持具を置く:	杖など置く	1 / 0
目をあけてぼーっとする:	正面方向を向き目を開けている	16 / *
目を閉じている:		5 / *
特定不可:	ベンチ着座直後に行動が特定できない	13 / *
未確認:	調査開始時にすでに休憩していた	2 / *

\* 計110カウント(1カウントに複数人の行動・状態を確認するため調査カウント数48を超過)

表2 2施設の休憩空間の位置に関する物理的条件

	I店	Rロビー
動線	隣接	隣接
売り場	離れている	隣接
バス停	離れている	離れている
駐車場	離れている	離れている 隣接動線上
垂直動線	離れている	離れている
出入り口	8m	2m
外の様子	見える	見える

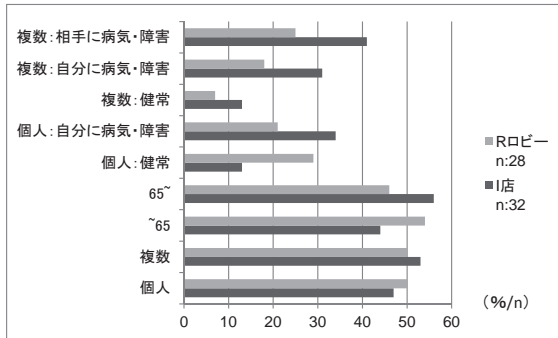


図3 アンケート調査回答者属性

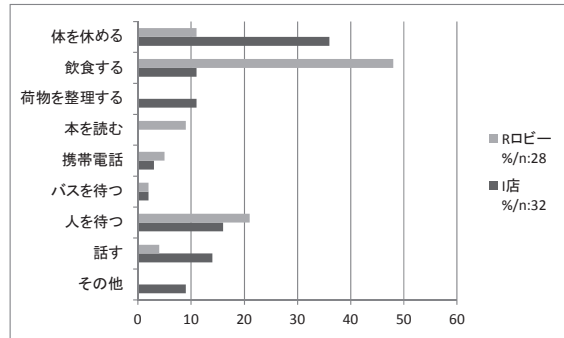


図4 休憩空間の利用目的

表3 環境評価の項目

1) 休憩空間としての利用しやすさ
2) 椅子の利用しやすさ
・ 肘掛
・ 背もたれ
・ 高さ
・ 材質
・ 杖・荷物を置く
・ 椅子の位置を変える
・ 複数で利用する
3) 位置の利用しやすさ
・ 人の動線に隣接している
・ 売り場から離れている(I店のみ)
・ 垂直動線から離れている
・ 出入りに近い
・ 外が見える

ングチェア 10 脚（座面高 38 cm、肘掛・背もたれ付き）を I 店内の図 1 に示した 2 の位置に設置した。利用者には、1) 休憩空間としての利用しやすさ、2) 椅子の利用しやすさ、3) 設置位置の利用しやすさについてアンケート調査による 5 段階評価（非常に当てはまる：2～全く当てはまらない：-2）で環境評価を行ってもらった。I 店から直線距離で約 400m の距離にある R センターの 1 階ロビーの休憩空間には、休憩空間 2 の配置に関する物理的条件に共通（表 2）がみられる。そこで、ここでも同様の調査を行った。

回答者数は 2 施設の合計で 60 名となった。2 施設ともに個人利用・複数利用、高齢者が同程度みられた。I 店の回答者には、個人利用の人に病気や障害、複数名による利用の人にも自分そしていっしょに利用している相手にも病気や障害がある人が多い（図 3）。

利用目的は、I 店では体を休める（36%/32 名）が多く、R ロビーではパン屋コーナーが隣接しているため飲食する（48%/28 名）が顕著であった（図 4）。その他、I 店では人を待つ（16%）、人と話す（11%）、R ロビーでは人を待つ（21%）、体を休める（11%）が続いた。

設定した環境評価項目を表 3 に示す。2 施設での環境評価の結果の平均値をみると、両施設ともに評価が高かった項目は、椅子の利用しやすさ（図 5）、椅子の利用しやすさに関する環境条件としては肘掛、背もたれ、高さ、材質、位置が調整できること、位置の利用しやすさに関する環境条件では出入りが近いことであった（図 6、7）。

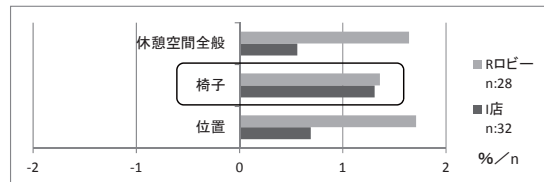


図5 利用しやすさの環境評価

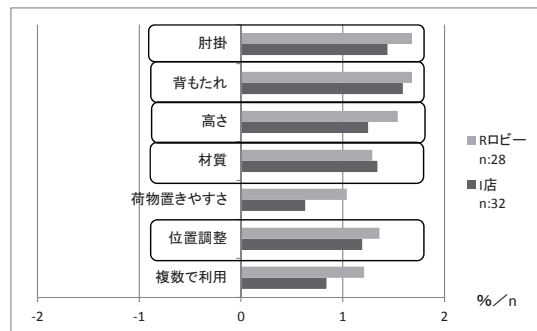


図6 椅子の利用しやすさ

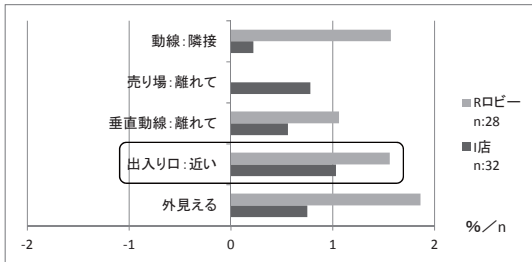


図7 位置の利用しやすさ

以上の高評価であった項目に対する回答を回答者属性別、利用目的で最も多かった項目でクロス分析したものが図8~11である。

2施設の回答者60名の中で高齢であり病気や障害があると答えた21名による環境評価では、背もたれがあること(評価1+2の回答%:90%/21名)、肘掛があること(90%)、高さ(81%)、材質(86%)の評価が高い。複数名による利用者で一緒に利用している人に病気・障害がある回答者(見守る立場にある人)には、いずれの環境条件も評価が高かった。背もたれ(91%/11名)、出入口が近いこと(100%)、肘掛、材質、高さ(90%)、椅子の位置を調整できること(80%)を利用しやすさに関係するとした。杖などの歩行支持具を利用していた回答者は、背もたれ、肘掛、出入口が近いこと(83%/12名)を評価していた。

I店における休憩空間利用の目的では、体を休めるが36%/32名で最も多かった。体を休めると回答した利用者では、背もたれ(95%/21名)、材質(91%)、肘掛、高さ(86%)、出入口に近いこと(81%)を評価していた。

【 考 察 】

高齢化率が高い地区にある対象施設では、高齢の利用者が半数を占めていた。加速する高齢化を考えると日常生活に直結

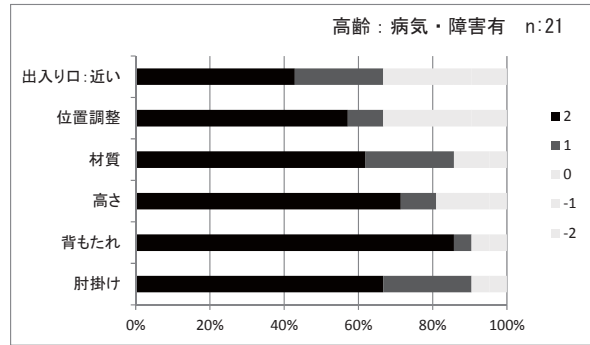


図8 高齢で病気・障害がある回答者の評価

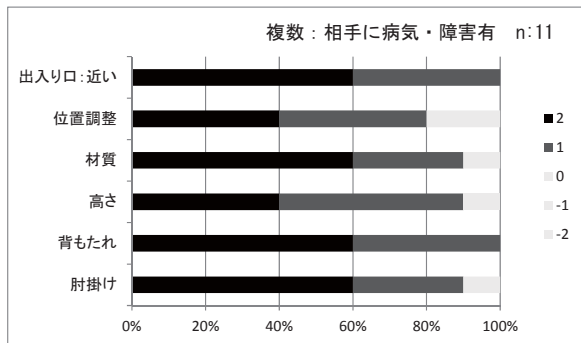


図9 一緒に利用している人に病気・障害があり回答者の評価

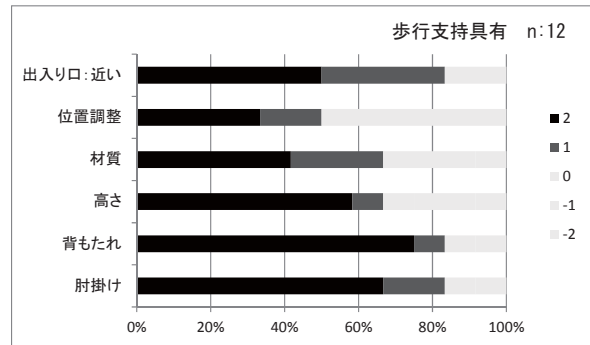


図10 歩行支持具利用の回答者の評価

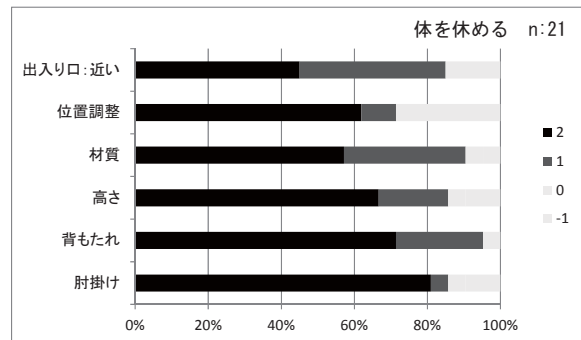


図11 休憩目的「体を休める」の回答者の評価

する公共施設の休憩空間は高齢者が使いやすいものである必要がある。対象施設では、人と交流するために長時間休憩空間が利用されていた。地区の高齢者の居場所として日常的に利用しやすい場であることが想定できる。また、体を休める・荷物の整理などのための短時間利用も確認できた。歩行支持具を利用する人の場合、シルバーカーなどの置き場所とスーパーで買った食材などの荷物の置き場所で一人当たりの休憩空間面積がより多く必要となる。I店の既存休憩空間1では、買い物カートやシルバーカー、荷物により定員の9名が座るとゆとりのない状態となっている。以上のことから、個人利用と複数名利用を想定した休憩空間、体を休めるためや複数の人的交流を主とした機能分化を想定した休憩空間の整備が必要であることがとらえられた。また、休憩空間自体の数を増やす必要性もある。

以上の結果に対応できる休憩空間として、個別可動で、背もたれ・肘掛付き、クッション性のある材質を用いた、高齢者の座位下腿長(足裏からひざ裏までの寸法)を考えた座面高38cmの椅子を設置した環境改善を行った。利用者による環境評価では、①病気・障害がある高齢者には、背もたれ・肘掛があり、座面高が一般の椅子よりも低いもの、また、座りやすいクッション性材質の椅子、②病気・障害がある人を含む複数名で利用する場合を想定すると、前述の条件に加えて、椅子の位置を調整できること、休憩空間が出入り口に近いところにあること、③杖などの歩行支持具を使用する人には、肘掛・背もたれがあること、出入り口に近い位置に休憩空間があることが「利用しやすさ」につながることを示された。これにより、以上の条件を満たした個別可動の椅子の設置を増やす必要性が確認できた。

地域では一人暮らしの高齢者の見守り体制の構築が進められている。高齢化が進む地区にある公共施設の休憩空間を高齢者自身が自主的に互いの安否確認をできる場ととらえる社会的認識も今後は必要であり、そのための整備も必要と考えられる。I店では、特定の高齢者による長時間利用により他の利用が阻まれる状況があることも調査前のI店との打ち合わせや環境評価調査時の利用者からの発言で確認できた。高齢者の居場所として機能させるには、利用者が互いに気持ち良く利用できることを地域住民と施設が考えていくプロセスも重要となってくると考えられる。

#### 【 経費使途明細 】

謝金 (プレ調査協力者への謝礼)	11,000円
傷害保険 (プレ調査協力者の自宅～施設までの外出時保険代)	3,920円
文具 (インクパッケージ2本)	9,960円
交通費 (都市住宅学会関西支部報告)	1,520円
交通費 (フィールド打合せ・プレ調査：4,000円×2人×2回)	16,000円
調査票記入者協力費 (クオカード・振込代：53,600円+850円)	54,650円
椅子購入 (環境評価実験用椅子20,470円×10脚+振込代840円)	205,410円
	302,460円